

氏名（本籍）	山田庄太郎（茨城県）
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	博甲第6761号
学位授与年月日	平成26年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	アウグスティヌスの時間論—『告白』の統一的主題を巡る研究—

主査	筑波大学教授	文学博士	保呂 篤彦
副査	筑波大学教授	博士（文学）	桑原 直己
副査	筑波大学教授	博士（宗教学）	津城 寛文
副査	首都大学東京名誉教授	文学士	加藤 信朗
副査	筑波大学非常勤講師	博士（文学）	トルファシュ リアナ

論文の要旨

本論文の目的は、アウグスティヌスの時間論として有名な『告白』11巻14-28章の一連の議論を手掛かりに、同書の統一的主題を明らかにすることにある。

『再考録』においてアウグスティヌス自身が述べているとおり、『告白』は1-10巻の自伝的記述と同11-13巻の創世記解釈という二つの部分に大きく分けることが可能であるが、この二つの部分がいかなる関係にあり、同書の統一的主題が何であるのかについては、これまで決定的な解釈が示されておらず、アウグスティヌス研究史上の一つの難問となっている。ところが、研究史を回顧すると、同書の統一的主題をめぐるこの論争において、有名な時間論がほとんど顧みられていない。これは、11巻後半の大部分を占めるこの哲学的議論が、その前後で展開される聖書解釈の論述と相いれない異質な要素であるように見えることによると思われる。一方、時間論それ自体を扱った従来の研究では、アウグスティヌスの思索のうちに近代的時間論の対応物としての体系だった議論の探究が専ら行われ、『告白』という書物に固有の文脈が存在することが見落とされる傾向があったと言える。『告白』に関する研究のこのような状況において、本稿は、『告白』の時間論に着目しつつ、それがこの著作の構成上いかなる働きを有しているのかという観点から、同書の統一的主題に関する研究を新たなアプローチによって試みるものである。

本論文は、そのため、まず時間論それ自体について論じ、次いでそれを『告白』全体の構成のうちに位置づけるという方法をとる。

第1章から第3章は時間論自体の分析に当てられている。第1章では、ピュロン派の懐疑主義者セクストス・エンペイリコスの時間論と比較考察することで、アウグスティヌスの時間論が時間それ自体ではなく、我々人間が時間を計測するその構造の解明を目指すものであったことが明らかにされる。さらに第2章において、時間の計測に関わる魂の働きとしてアウグスティヌスが挙げている「記憶」「注視」「期待」に関する議論の分析を通して、時間の計測における、魂の「注視」ないし「意志」の働きの根源性を描き出した上で、第3章では、アリストテレスとプロティノスの議論との対比において、アウグスティヌスの時間論が創世記解釈においてもつ意義を明らかにしている。

第4章と第5章は、先行研究によって明らかにされている『告白』前半の諸巻におけるキアスムス構造を手がかりにしつつ、そこで展開される自伝的叙述の分析が行われている。第4章では、アウグスティヌスが自身の回心をどのようなものとして描いているかが分析され、キケロの『ホルテンシウス』と「プラトン派の書物」との対比のなかで、それが「真の哲学」の発見として位置づけられていることが明らかにされ、第5章では、キアスムス構造の転換点に位置づけられるアカデメイア派懐疑論に対するアウグスティヌスの見解の分析から、この「真の哲学」としてのキリスト教の発見が絶えざる知的探究の結果として位置づけられていることが明らかにされる。

以上の考察をもとに、第6章では『告白』前半の諸巻と11巻における時間論とがいかなる関係にあるかが論じられる。筆者によれば、物的なものから魂へ、外から内へという上昇のモチーフが両者に共通して認められるのであり、これによって時間論はそれがその一部をなす後半巻の創世記解釈と前半巻の自伝的叙述とを繋ぐ要の役割を果たすものであることがはっきりする。これを受けて第7章では、『告白』の基調をなす先の上昇のモチーフをもとに、『告白』の統一的主题が論じられる。アウグスティヌスはこの上昇のモチーフを明示的に語る箇所のおいでも、その有用性ととも有限性ないし限界についても語っており、それが真理の存在を告げ知らせるものの、真理それ自体が何であるかを教えることがなく、真理をそのうちで開示する聖書の探究の必要性が示される。このようにして、『告白』はその全巻をとおして、知性と心情とを介して読者を信仰へと導くことを目指しており、この信仰への促しこそがその統一的主题であることが最終的に明らかにされる。

審査の要旨

1 批評

アウグスティヌスの著書である『告白』のなかで展開されている時間論は極めて有名であり、フッサール以降現在に至るまで、時間の問題を研究する多くの研究者によって取り上げられてきた。また、『告白』が、この時間論を含む後半の聖書解釈に関わる論述と前半の自伝的叙述という、一見、相互に結びつきのない二つの部分から構成されているため、これら二つの部分が互いに関係するのか、そして『告白』という書物全体に統一的主题があるのか、またあるとすれば、それは一体いかなるものであるのかという問題が、アウグスティヌス研究において長らく困難な問題とされてきた。その意味では、本学位請求論文は、『告白』に関する従来から知られている主要な二つのテーマに関わるものであり、特に目新しいテーマを取り扱うものではない。

しかしながら、本論文も指摘するとおり、『告白』の統一的主题を考慮に入れてその時間論を考察する研究も、逆に時間論を十分考慮に入れることによって、従来から議論の絶えなかった『告白』の統一的主题を明らかにせよとする研究も、ともにこれまでほとんど行われてこなかった。それは『告白』の時間論が、それ自体のもつ現代性によって、書物全体のなかで異質な論述に見えるせいでもありと考えられる。本論文はこのような研究史を踏まえて、時間論が『告白』の統一的主题を明らかにするための鍵となる重要な論述であるという正当な（しかし従来ほとんど顧みられることのなかった）前提に立って、この時間論を新たに詳細に分析し直すことにより、『告白』という書物の統一的主题と全体構造に関して、極めて斬新で説得力のある見解を提示することに成功している。

本論文もなお、『告白』という書物全体を視野に収めるとき、その細部にわたる理解に関して、なお課題を残してはいる。例えば、11巻における時間論について筆者が指摘した過去と未来の対称性という理解が『告白』全巻の論述との関わりにおいてどのように考えられうるかといった問題が残されていよう。また、マニ教徒たちの思想やストア派の哲学など、『告白』の論述が前提している古代末期に地中海世界で影響力をもった諸思想そのものにも本論文は十分説き及んでいないが、筆者自身が自覚しているとおり、『告白』とアウグス

ティヌスの思想に関するより包括的な理解を、また細部にわたるより鮮明な理解を得るためには、今後このような研究が不可欠になると思われる。ただし、これらの点は本論文の価値を損なうものでは決してない。むしろ、これらは本論文の研究成果自体が今後のアウグスティヌス研究の課題として具体的に明らかにしたものであり、本論文の研究成果を基礎にして探究されるべきものであると言うべきである。

以上述べたとおり、『告白』の統一的主題および時間論がそこにおいて果たす役割を独自の視点から解明した点において、また、それを通して今後のアウグスティヌス研究に新たな展望を開いた点において、本論文がアウグスティヌス研究に大きく貢献する業績であることに異論の余地はない。

2 最終試験

平成 26 年 2 月 4 日、人文社会科学研究所科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。